

新約聖書の中の祈り 第 12 回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「使徒の働きにおける祈り」・・・「使徒の働き」の中から、27 の祈りの事例を見る。
 本日は、第 8 から第 14 の、7 つの事例

8. 使 8 : 15 二人は下って行って、彼らが聖霊を受けるように祈った。

(1) ペテロとヨハネ、2 人の使徒による祈り

(2) 経緯 使 8 : 1~14、16

- ① 1 節 執事ステパノの殉教事件を発端として、エルサレム教会に対する迫害が起こった。
- ② 1 節 使徒たち以外の信者たちは、エルサレムから追い出されて、ユダヤのエルサレム以外の地域に散らされた。またある者たちは、ユダヤ地方からも出て、北上し、中部のサマリア地方へと散らされた。
- ③ 4 節 散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた。
 - 「みことばの福音を伝える」・・・原文は、「みことばを・福音として伝える」である。「福音として伝える」は動詞 1 語である。
 - 散らされた人々は、神の裁きについて警告をしながら巡り歩いたのではない。まして、ステパノが殺された、不当な迫害を受けたと抗議の声をあげながら巡り歩いたのではない。彼らは、福音、良き知らせ、喜びのメッセージを伝えたのである。その内容は、イスラエル民族が待ち望んでいたメシアが到来したこと、イエスがメシアであること、そしてイエスは復活したことである。
 - 彼らは、のちには、ユダヤとサマリアからさらに遠く、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んでいった。この間、伝えた相手は、それらの地域に居留するユダヤ人たちに限られていた（使徒 11 : 19）
 - 当時の一般的なユダヤ人の感覚では、人類は 3 つに区分される。ユダヤ人、サマリア人、そしてサマリア人以外の異邦人である。異邦人はユダヤ教に改宗すれば救いを受けることができる。しかし、サマリア人は、モーセ五書を聖典にしながらも、サマリアのゲリジム山を聖地とし、ユ

ダヤ人と反目していた。ユダヤ人にとって、サマリア人は他の異邦人よりも救いから遠い、いや、縁のない民族であると考えられていた。

- ④ 5 節 執事ピリポは、サマリア地方の町へ行き、人々に「キリストを宣べ伝えた」、すなわちイエスがメシアであると教えた。
- 「宣べ伝えた」という動詞は、未完了時制・能動態が使われている。「宣べ伝え始めて、引き続き宣べ伝えていて、まだ完了していなかった」という意味である。ピリポの役割が先触れの的なものであり、彼の後に、使徒たちが来ることを前提にした表現である。
- ⑤ 6～8 節 ピリポの宣教には、しるしが伴った。
- 汚れた霊たち（悪霊）に悩まされていた人々から、悪霊が大声で叫びながら出て行った
 - 中風の人や足の不自由な人が癒された
 - 悪霊の問題と身体的な病気とは区別されていることに注意。病気の原因が必ず悪霊であるというのは、誤解。
- ⑥ 12 節 サマリア人たちは、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えたことを信じて、男も女もバプテスマを受けた。
- ⑦ 16 節 このバプテスマは、主イエスの名によって水のバプテスマを受けたのであった。しかし、このとき、聖霊はサマリア人たちのだれにも、下らなかった。
- ⑧ 14 節 ピリポはエルサレムの使徒たちに、サマリア人たちが神のことばを受け入れたと、知らせた。
- ⑨ 14 節 エルサレムの使徒たちは、二人の使徒、ペテロとヨハネを派遣した。
- (3) 祈り 15 節「二人は下って行って、彼ら（サマリア人たち）が聖霊を受けるように祈った」
- ① 「祈った」ギリプロセウコーマイ・・・ギリデエーシス願いを求めた、ではない。原文を直訳すると、「彼らに関して祈った、どのようにしたら、彼らが聖霊を受けるのか」
- ② 「聖霊を受けるように」・・・「ように」と訳されているギリホポース、英語の how、どのようにしたら、という意味もある。→ サマリア人も今や聖霊によってバプテスマを受けるのでしょうか？ 受けるのだとしたら、どのようにしたら、よいのでしょうか？→ よって、この祈りは、主のみこころを尋ねる内容であった。
- (4) 祈りの結果 17 節
- ① 祈りを通して、ペテロとヨハネは、信じたサマリア人たちの上に手を置くように示された。
- ② 二人が彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

9. 使 8 : 22 この悪事を悔い改めて、主に祈れ。もしかしたら、心に抱いた思いが赦されるかもしれない。

(1) 祈りそのものではない。使徒ペテロが魔術師シモンに語ったことば

(2) 経緯 使 8 : 18~23

① 18~19 節 シモンは、使徒たちが手を置くことで御霊が与えられるのを見た。シモンは使徒たちのところに金を持って来て、使徒たちに頼んだ。「私が手を置く者がだれでも聖霊を受けられるように、その権威を私にも下さい」

② 20~23 節 シモンの要求に対するペテロの応答

- おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい。おまえが金で神の賜物を手に入れようとしているからだ。
- おまえは、このことに何の関係もないし、あずかることもできない。おまえの心が神の前に正しくないからだ。
 - 英語の聖書では、「**part** もないし、**lot** もない」。「**part** は、現在受ける分、**lot** は、将来受ける分。現在受ける分とは、霊的救いや聖霊の賜物、将来受ける分とは、メシアの王国における相続財産や割り当て地」と解すると、シモンは信者ではないことになる。
- だから、この悪事を悔い改めて、主に祈れ。もしかしたら、心に抱いた思いが赦されるかもしれない。
- おまえが苦い悪意と、不義の束縛の中にいることが、私には見えるのだ。
 - 「不義の束縛」とは、罪の鎖がその人の首のまわりに巻き付いている状態を指す。詩篇 58 : 6 には「悪の束縛」という表現がある。
 - シモンが金で神の賜物を買おうとしたことは、あたかも自分で自分の首に鎖を巻き付けているようなもの、ということ。

(3) 22 節 使徒ペテロは、魔術師シモンに対して、神の賜物を金で手に入れようとした悪事を許していただくように祈りなさい、と命じた。

① 祈りの内容は、許しを求める祈り

② 【補足「使徒の働き」コンメンタール 196 頁より】「もしかしたら、～かもしれない」と訳されている^ギ「エイ アラ」は、「もしそうであれば」の意味。
→ 「もし悔い改めて主に祈るなら、心に抱いた思いが赦される」となる。
ここでペテロが言う「悔い改める」とは、考えを変えること、向きを変えることである。考えを変えて、神の方を向いて、赦しを求めれば、神は赦すことを控えるようなお方ではない。ここで、ペテロが、「もしそうであれば」と言ったのは、本当に魔術師シモンが考えを変えるかどうか、それはペテロにはわからないからである。

10. 使 8:24 あなたがたが言ったことが何ひとつ私の身に起こらないように、私のために主に祈ってください。

(1) 祈りそのものではない。魔術師シモンが、ペテロとヨハネに、自分のために祈ってくれるよう頼んだときのことば。とりなしの祈りを求めたものである

(2) 【補足「使徒の働き」コンメンタール 197 頁より】

① 21 節で、シモンの心は神の前に正しくないと言われていたので、シモンは自分ではきちんと祈ることはできないと感じたのかもしれない。22 節で、シモンはペテロから「悔い改めて祈れ」と言われたのであるが、24 節では、シモンは自分で祈るかわりに、ペテロとヨハネに祈ってもらおうとした

② シモンからのとりなしの祈りの求めに対して、ペテロやヨハネが祈ったとは記録されていない。

③ 25 節の「こうして」とは、17 節からの続きであり、サマリア人たちが確かに聖霊を受けたのを見たので、ということである。

④ 25 節、「こうして、使徒たちは証しをし、主のことばを語った」

- 「証しをし」・・・使徒たちが何を証言したかは書かれていないが、文脈から、第一に、イエスがメシアであること、第二に、サマリア人が救いを受けたこと、この二つを証ししたものと推測される。

- 「主のことばを語った」・・・ピリポが宣教していたサマリアのその町で、使徒たちも教えをし、神のことばを語った。

⑤ 25 節、「主のことばを語った後、エルサレムに戻って行った。彼ら（ペテロとヨハネ）はサマリア人の多くの村で福音を宣べ伝えた」

- エルサレムに戻る途中でも、使徒たちはサマリア人の村々で福音を宣べ伝えた → サマリア人への福音宣教は使徒たちによって認証されたということ

11. 使 9:11 彼（サウロ）はそこで祈っています。

(1) 経緯 使 9:1~12

① 1 節 「サウロはなおも」・・・使 8:1~3 エルサレムでのサウロの活動、サウロはその活動範囲をさらに国外にまで広げようとした

② 2 節 「ダマスコ」・・・シリアのダマスコ、古代から交通の要衝、大きな町

③ 3~9 節 サウロは、ダマスコへ行く途中で、復活のイエスに出会って、目が見えなくなった。三日間、食べることも飲むこともしなかった。

④ 12 節 サウロは幻を見た。アナニヤという名の人が入って来て、自分の上に手を置き、再び見えるようにしてくれる、という内容であった。

(2) 祈りの内容：幻を受けて、サウロはアナニヤの来訪を待つと共に、自分がこれから何をすべきか、神に導きを祈っていたものと推測される。

(3) 祈りの答え 使徒 9：15～16

12. 使 9：40 ペテロは皆を外に出し、ひざまずいて祈った。そして、遺体の方を向いて、「タビタ、起きなさい」と言った。すると彼女は目を開け、ペテロを見て起き上がった。

(1) 経緯 9：36～43

(2) この祈りの特徴

- ① ペテロは自分ひとりで祈るために、他の人を「皆外に出した」
- ② ペテロの祈りの姿勢は、「ひざまずいた」
- ③ 祈りの内容は、特別な願い求め、タビタという女の弟子のよみがえり

13. 使 10：2 彼は敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ、民に多くの施しをし、いつも神に祈りをささげていた。

(1) 祈りをしていたのは、コルネリウスという異邦人（使 10：1～2）

- ① ローマ軍は、エルサレムではなく、地中海岸にある人造港の町カイサリアに駐留していた。コルネリウスは、百人隊長。
- ② 「神を恐れる人」＝イスラエルの神を信じた。しかし、まだユダヤ教には改宗してはいない。
- ③ 改宗するためには、痛みを伴う割礼が必要だが、そこまではしていない。しかし、彼の祈りは、いつもイスラエルの神に対してなされていた。

(2) 祈りの内容：イスラエルの神についてもっと知りたいという願い（←15 番以降）

(3) コルネリウスは、この祈りの時点では、まだイエスをメシアとしては信じていないので、未信者である。よって、この祈りは、信者ではない人の祈りの実例

14. 使 10：3～4 ある日の午後三時ごろ、彼は幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。その御使いは彼のところに来て、「コルネリウス」と呼びかけた。彼は御使いを見つめていたが、恐ろしくなって言った。「主よ、何でしょうか。」すると御使いは言った。「あなたの祈りと施しは神の御前に上って、覚えられています。」

- (1) 「祈りが神の御前に上って覚えられている」とは、その祈りがもうすぐ答えられるということ
- (2) これは、神が信者でない人の祈りを聞かれるという実例（ただし、祈りの内容は、神を求めることに限られる）

コルネリオスの祈りがどのように答えられたのか、次回 15 番以降にて。

□【補足】 魔術師シモンは、信者であったのか、それともそうではなかったのか？

使 8 章 20～23 節、シモンの要求に対するペテロの応答・・・下線部は、通常、信者について使わない表現である。そのため、シモンが信者ではなかったという可能性はある。

その場合、13 節の「シモン自身も信じて」とは、奇跡を見ての「信じる」であって、救いに至る信仰ではなかったということになる（類例＝ヨハネ 2：23～25）。

おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい。おまえが金で神の賜物を手に入れようとしているからだ。

おまえは、このことに何の関係もないし、あずかることもできない。おまえの心が神の前に正しくないからだ。

だから、この悪事を悔い改めて、主に祈れ。もしかしたら、心に抱いた思いが赦されるかもしれない。

おまえが苦い悪意と、不義の束縛の中にいることが、私には見えるのだ

ただし、ピリポが宣教して間もないことを考慮すると、シモンは信者ではあったが、彼の霊的成長がまだ不十分であった、という可能性もある。